

和紙



おりおりの記

## ヨーロッパの小国の外交の難しさ

前セルビア特命全権大使 丸山 純一

バルカン半島の中央にセルビアという国がある。「セビアの理髪師」のセビアとよく間違えられるが、セビアはスペインの都市の名前、セルビアは国の名前である。実はこのセルビア、大変な親日国である。その理由は日本から経済援助で贈られた「黄色いバス」によるところが大きい。21世紀に入って間もない頃、ベオグラードはNATO空爆や経済制裁の後遺症で満足に走れるバスが極端に減って市民は不自由な生活を強いられていた。そんな中、日本から黄色い新車のバスが100台ほど送られてきた。ベオグラード市民は大喜びし、親しみを込めてこの黄色いバスを「ヤパナツ（日本人）」と呼ぶようになった。その黄色いバスは今でもベオグラード市内を走っていて、「さすが日本のバスは壊れない」と評判である。もっとも、バスのメンテナンスを行っているのはベオグラードの交通局であり、さらに言うところのバスはドイツ製なのである。とはいえ、このバスが日本の援助で贈られたことに変わりはなく、セルビアの人達の日本への感謝の念に変わりはない。

そんなヨーロッパの親日国セルビアが、今ロシアのウクライナ侵攻によって難しい立場に立たされている。セルビアはEUへの加盟を目指しているが、隣国のモンテネグロや北マケドニアはEU加盟の前提になっているNATOへの加盟を果たしているのに、セルビアはコソヴォ問題等でのロシアとの外交上及び安全保障上の関係を考慮して

NATOに加盟していない。セルビアは「コソヴォはセルビアの自治州のひとつ」としてその独立を認めないが、西側の主要国は日本も含めてほとんどの国



がコソヴォの独立を承認している。コソヴォの独立を認めていない主要国はロシアと中国のみである。セルビアはそのロシアに「コソヴォ問題でセルビアを支持しない」と言われると極めて困難な立場に陥る。また、ロシアの供給する天然ガスに100%依存しているという事情もあって、セルビアはロシアのウクライナ侵攻を正面から非難しにくい。かといってロシアの行為を正当化するような行動も取れない。まさにヨーロッパの小国の外交の難しさを象徴するような話と言えるのではなかろうか。

筆者は令和4年11月に、セルビアの名所解説や料理・言語などの紹介、及びセルビアの置かれた外交上の立場などを解説した「セルビア紀行」をかまくら春秋社から出版。全国の書店及びアマゾン等で販売されている。